



遠視がある場合は 10~15Δ減少しても高 AC/A 比の可能性があり遠近ともほぼ斜視角が同じで、眼位が改善するから判断すること。

例) 左眼内斜視

遠見 正視状態
完全矯正レンズ装用

近見 +3D 調節
完全矯正レンズ装用

近見 近見で無調節
+3.0D 付加レンズ装用

非調節性内斜視(基礎型など)	屈折性調節性内斜視(von Noorden)
殆ど変化なし	10(15)Δ以上減少 角反中央
上の偏位のまま (固視目標を見る為の輻輳はある)	角反中央
上の偏位のまま (固視目標を見る為の輻輳はある)	角反中央



近見は輻輳するので(輻輳角分)遠見より見かけ上、内斜してプリズム量が増加すると勘違いする人がいるが、近見の視標を見ている視線からの偏位となるので、偏位量は変わらず APCT の量としては理論上変化はない。



高 AC/A 比ならば、遠視があつて内斜視となつていた分は完全矯正レンズで解消するはず。

遠見 完全矯正レンズ装用

近見 +3D 調節
完全矯正レンズ装用

近見 近見で無調節
+3.0D 付加レンズ装用

部分調節性内斜視(主流)	非屈折性調節性内斜視(von Noorden)
10Δ以上減少 10Δ以上残存	角反中央
上の偏位のまま (固視目標を見る為の輻輳はある)	上記より 10Δ 以上増加
上の偏位のまま	角反中央

定義が曖昧なもの



この要素がないと調節因子ではない。例) 15Δで眼鏡にて 6Δになった場合は調節性とは言えない。

見解が一致していない

von Noorden・欧米の成書

屈折性調節性又は準正位又は微小斜視

日本

屈折性調節性? 部分調節性?

遠見 完全矯正レンズ装用	10Δ以上減少 10Δ以内残存	
近見 +3D 調節 完全矯正レンズ装用	上の偏位のまま	
近見 近見で無調節 +3.0D 付加レンズ装用	上の偏位のまま	

欧米は大まか



近見の所見から少なくとも高 AC/A 比ではないので、非屈折性調節性内斜視ではない。